

〔書評〕

法華經研究Ⅷ

中村瑞隆編『法華經の思想と基盤』

湯田 豊

キリスト教徒にとって聖書が最高の価値であることを否定する人は恐らくひとりもないであろう。しかし、キリスト教のメッセージは新約聖書ではなく、キリストの人格である。イスラム教のなかにこの「キリストの人格」に対応するものがあるとすれば、それはマホメットではなく、「コーラン」(正確にはクルアーン)である。イスラム教は、優れて「コーラン」信仰であるところが、「法華經」を信仰する日蓮宗は、イスラムのコーラン信仰と極めて酷似しているような印象を与える。もちろん、このような印象は正しくない。なぜなら、コーランは神(アッラー)のことは啓示するけれども、神そのものではないからである。しかるに日蓮宗においては、『法華經』は単に人類に靈感を吹き込む書物ではない。それは法を説く生身のブツダ自身であり、この經典に含まれている一言一句はすべてみな、ブツダのことはそのものである。キリスト教の表現を借りて言えば、『法華經』はブツダの「人格」にはかならない。そして、「キリストの人格」を中核とするキリスト教において「キリスト論」が重要であるように、法華經に關しても「ブツダ論」は不可避である。

このような思想的背景を念頭に置けば、なぜ、『法華經』が研究の対象になるかは一目瞭然である。わが国における『法華經』研究のメッカである立

正大学仏教学部は、そのスタッフを動員して『法華經』の総合研究を推進して来た。『法華經』の思想と文化(昭和40年3月)から『法華經の思想と基盤』(昭和55年2月)に至るまで、立正大学仏教学部はあらゆる角度からの法華經の総合的な研究を粘り強く企てたのである。『法華經の思想と基盤』は、法華研究Ⅷ(シリーズの八冊目)として、立正大学の中村瑞隆教授によって編集され、出版された。

『法華經の思想と文化』は、昭和51—52年度の文部省科学研究費による総合研究(A)『法華經形成の思想史的背景とその展開』の研究成果の一部である。この研究は中村瑞隆教授を研究代表者とし、Ⅰ 法華經と外教の交渉、Ⅱ 法華經形成の背景、Ⅲ 法華思想の展開がテーマとして選ばれた。この三つのテーマに關して、立正大学仏教学部、および東西の諸大学の専門家が、それぞれ「現場」から発言している。これらの専門家はわが国におけるインド学、および仏教学の第一線で活躍している人々である。

さて、本書は三篇から成り、第一篇は法華經と外教の交渉を扱っている。このテーマに關して、金倉圓照博士、山口恵照(大阪大)、塚本啓祥(東北大)、松長有慶(高野山大)の各教授、北條賢三助教授(大正大)が種々の視角から論述している。第二篇は法華經形成の基盤に關する研究である。この問題をめぐって、平川彰(早大)、中村瑞隆、勝呂信静(立正大)の各教授、伊藤瑞毅、三友健容の各助教授(立正大)が議論を展開している。また久留宮圓秀助教授(立正大)はギリギット出土法華經原本拾遺というテーマで、法華經写本に關して書誌学的観点から堅実な基礎研究をしている。第三篇は、法華思想の展開をテーマにしている。これに關しては、野村耀昌教授(立正大)、河村孝照氏(東洋大東洋学専任研究所員)、丸山孝雄教授(立正大)、および坂輪宣敬助教授(立正大)が研究資料を公けにした。

わたくしは以下において『法華經の思想と基盤』に關する書評を試みるが、その際すべての論文を詳細に批評することは断念した。すべてを説明するこ

とは、結局、何も説明しないことと同じだからである。それと同じく、すべてを書評することは、読者の忍耐力を疲れさせてしまっただけである。書評においては、批評の対象の選択が重要である。中村瑞隆教授は本書の序のなかで「本書は法華経形成の思想史的背景とその展開を中心課題とする総合研究を企劃したことに始まる」と述べている。結局、本書のテーマは「法華経形成の思想史的背景とその展開」ということになろう。わたくしは主として思想的な観点に立脚して、東西の諸大学の学者の論文を論評したいと思う。

学問研究においてもっとも重要なことの一つは、簡明 (conciseness) である。簡明は人文科学においては美德である。しかし、インド学および仏教学に関しても、近年研究は益々専門化の一路を辿り、専門論文を通読することは煩わしくなりつつある。研究のヴィジョンが見失われ、目標も定まらない状況にわれわれは置かれている。しかし、『法華経の思想と基盤』は、ある意味で、このような弊害から解放されていると言えないこともない。なぜなら、本書には英文の要旨が添えられ、各論文の要点が比較的簡明に述べられているからである。この英文要旨は生駒幸運氏によって作成された。われわれは氏の労苦に対して謝意を表明しなければならない。氏の英訳のお陰で、われわれは金倉博士から始まって坂輪氏に終わる論文の趣旨を容易に理解することが出来るからである。

## II

『法華経の思想と基盤』の巻頭論文は金倉圓照博士の「仏身観と外教の交渉」である。私見によれば、金倉博士の主要テーマは「ブツダ論」、および法華経と外教の交渉である。金倉博士自身は「ブツダ論」という用語の代わりに、「仏身観」という術語を用いている。三身(法身・報身・応身)は、確かに「ブツダ論」ないし「仏身観」の中核である。博士は、『法華経』のなかに法身、報身、および応身、あるいはこれに類する術語は何処にも見い

だされないと主張し、三身説が『法華経』のなかには存在しないと断定した。三身説は中国の天台宗において初めて成立したというのが、金倉論文のテーマの一つである。博士のこの所論は、今はなき坂本幸男博士の論文「中国に於ける法華経研究史の研究」に負うところ多大である。坂本論文の学的成果を踏まえて、金倉博士は「……法華経仏身観の起原及び展開が、専ら中国における出来事であったことが、よく了解せられる」(五ページ)という結論を下した。確かに、三身説そのものは『法華経』のなかには存在しないであろう。しかし金倉博士は、法華経には仏身観はまったく存在しないとは言っていない。それに、中村瑞隆教授によれば、「法身」(dharma-kaya) という語は、薬草喻品に見いだされる。薬草喻品、ガーター、82には sa-pasyati maha-prajño dharmakāyam aśeṣataḥ……という文句が存在する。これは、中村教授の指摘する通りである(本書、一八五ページ参照)。

しかし、たとい法華経のなかに「法身」という語が存在したとしても、法華経に三身説が体系的な形で展開されていることにはなるまい。キリスト教においてもっとも重要な「三位一体説」は新約聖書のなかには見いだされない。新約聖書のなかには、父と子と聖霊という語は存在するが、それだけでは「三位一体説」は成立しない。三位一体という語が存在し、しかも父と子と聖霊が体系的に論じられなければ、三位一体説は成立しない。法華経における三身説についても、まったく同じことが言えよう。

金倉論文のもう一つのテーマは、法華経と外教の交渉である。わたくしは「交渉」を広義の「関係」であると理解する。いずれにせよ、法華経と外教(仏教以外のインド哲なし宗教)の直接的な関係を証明することは不可能に近い。それゆえ、法華経と外教の交渉についての金倉論文の結論は次の通りである——「結局、法華経の仏身観は、直接には外教と交渉がないという結論に達せざるを得ない」(二七ページ)と。法華経と外教の交渉というテーマに関して注目しているのは、比較の方法である。博士は、法華経ないし仏

教と外教に関して、両者の間の相違よりもむしろ類似を重視している。ところで、本書のなかで比較の方法を真剣に考えているのは伊藤瑞毅助教授である。伊藤氏の仏教研究の基礎は、比較の方法である。氏は同一性(identity)と相違(differences)の両面を公平に考量して、ある結論に到達しようとする。氏は二つの比較されるべきもののなかに共通点を見いだそうと努力すると同時に、その二つの間に独特のニュアンスを見てとうとうとする。しかし、わたくし自身は、類似が存在することを否定しないけれども、結局、類似よりもむしろ相違を強調する。金倉博士は仏教と外教の類似を重視する。それゆえ、両者の底を流れている偉大な次元のインド精神が開花したものととして、博士は仏教と外教の関係を理解しようとする。

本書の第一篇、第二章において、山口恵照教授は「法華経とインド哲学」というテーマで、最高に興味深い問題を扱っている。山口論文はその結論よりもむしろ問題提起の斬新さに価値がある。わたくしは以下において山口教授の示唆に富む提案を論評しよう。山口論文は、オーム(om)ないしナマス(namas)の重要性に着目する。ここでは、オーム(教授はオーンと音写)とナマスとは同一視される。山口論文はインド哲学のオームと法華経のナマス(南無)の類似点を指摘する。次いで、この論文はバガヴァッド・ギーターと法華経を対応させ、ギーターの神クリシナを法華経的な「導師」として理解している。ここで教授が扱っているこれら二つの論点は、わたくしの眼から見えて極めて興味深いものがある。わたくしは、これらの二点について論じたい。

『法華経』序品には om namah sarva-buddha-bodhisattvabhiyah と、こう文句が見いだされる。教授は、ここでオームとナマスが併用されている点に着目し、同じことがインド哲学においても認められると言う。教授によれば、法華経およびインド哲学に共通するのは、オームないしナマスが「帰依」を意味することである。このことを認めれば、われわれは法華経がナマスから発展し、それに帰着するという結論に到達する。ナマスは「妙法蓮華経」へ

の帰依・信心の表明であり(本書、二七ページ参照)、オームによって象徴される「ブラフマンや神々は、聖典の帰趣であり、この帰趣に南無敬礼しつつ、聖典があらわされたものであるから、聖典の伝承も、『オーン』にはじまる帰敬文によって、はじめて正統な帰属を証明される」(三六ページ)ということになる。

『法華経』におけるナマス(南無)が妙法蓮華経への帰依、あるいは信仰の表明であることは明白である。しかし、インド哲学におけるオームがブラフマンへの帰依を意味するか否かは問題である。オームという語は、ウパニシャッドにおいて頻繁に使用され、その最古の形はチャンドーギヤ・ウパニシャッド、I・2・1-8のなかに見いだされる。ここでは、神々は鬼神を破滅させるためにウド・ギーター(udgita)を必要とする。ウド・ギーターは、オームという音節で始まるサーマンの吟唱であるが、神々は最後にウド・ギーターを口のなかにある息として「ウパース」(upās)した。もしもこの「ウパース」を崇拜すると訳せば、神々は口のなかの息をウド・ギーターとして崇拜した、あるいはそれに帰命したと解釈することが出来るけれども、神々はウド・ギーターを「熱心に求める」(wants)のである。つまり、神々はウド・ギーターのなかに秘められている、いわば呪術的な力を鬼神の破滅という彼ら自身の目的のために利用したにすぎない。古いウパニシャッドに関する限り、アーマンないしブラフマンに対する帰依あるいは崇拜は存在しない。

オーン、ヴァースデーヴァに南無する。オーン、ブラフマン等に帰命する——これら二つの文句によって、山口教授は南無ないし帰命がそれらの趣旨であると解釈した(三六ページ)。これは、確かに魅惑的な解釈である。ウパニシャッドに関しては、わたくしはオームを欲望を満足させる力を備えたウド・ギーターと解釈したい。ここでは、自己の力を頼むことが基本的な姿勢である。オームはブラフマンの象徴である。ギーターにおいては、オームはヴァースデーヴァ(クリシナ)の象徴でもある。ギーター、VII・8において、

クリシナはアルジュナに対して「……わたしはすべてのヴェーダのなかのオームである」と宣言する。ギーターにおいて法華経の「ナマス」に対応するのが果してオームであるか否かは、今後、詳しく検討されねばならないであろう。

山口教授は、ギーターの導師としてのクリシナを法華経におけるブッダ・釈迦如来に対応させている(三三―四一ページ)。山口教授によれば、アルジュナの問題は「単に自己自身の当面する戦争の勝敗ではなくて、人間すべてが希う永遠の平和(涅槃)であり、これに対する従者クリシナ(Krishna)は、単に当面の平和問題に答えるだけではなくて、この問題の究極的解決をはかる導師として君臨しているのである」(三九ページ)。そして、「随宣所説」の「如来・応供」であるクリシナは、すべての善男子、善女人だけでなく、すべての悪男子、悪女人の導師である。クリシナは「すべての衆生を真実のめざめにみちびき、真実に帰依せしめる」(四〇ページ)のである。そして、「ギーターの全篇は真実の方便、善巧方便を内容とする哲学であり宗教である」(四〇ページ)ということになる。山口教授は次のような結論を下した——「クリシナはギーターにおいて、久遠実成の自覚者(故仏)であり、久遠実成の自覚者として、一切衆生を利益してやまない三界の導師なのであって、法華経における教主・釈尊(釈迦如来)に遙かに対応している。クリシナの君臨するギーターの全篇は、釈尊を主役とする法華経に、とくにその主要な諸品、方便・如来寿量の二品などに、大きく対応しているのである」(四〇―四一ページ)、と。

ギーターと法華経が極めて類似していることを指摘した山口論文は示唆に富み、しかも挑発的である。山口論文は大きな問題をはらんでいる。ギーターに深い関心を抱いている一人の学徒の立場から、わたくしは山口論文における若干の問題点を指摘しよう。

まず最初に、山口論文はアルジュナとクリシナの両者が超カーストの平等

な立場を求める点では等しいと主張するが、わたくしはギーターをインド的な意味での階級(『ヴァルナ』)理論のスポークスマンとして理解する。クリシナはアルジュナに対してカルマ(業)・輪廻・解脱という究極の問題解決を示したと山口論文は主張する。しかし、わたくしはクリシナのねらいは階級制度の擁護にあったと思う。クリシナがアルジュナに向かって、自己の親族と戦い、彼らを殺害することを命じたのは、それがクシャトリアの義務であるとクリシナが確信したからにはかならない。

次いで、山口論文においては、クリシナはアルジュナだけでなく、すべての人間の導師として理想化されている。しかし、クリシナが救うのは彼を愛し、彼を信じる人々である(Ⅻ・6―7)。うぬぼれの強い人々、高慢な人々、財産の誇りとおごりに満ちた人々、名目上の祭祀を偽善的に行ない、ヴェーダの命令を守らない人々、自我意識、力、傲慢、欲望、怒りにおもむく人々、神を憎む人々——彼らはすべて神の呪いを受けて地獄に落ちる(Ⅻ・17―21参照)。ギーターにおいては、確かに悪人も救われるという文句が存在する。しかし、その場合でさえ、悪人はひたむきにクリシナを愛し、彼を信じなければならぬ。クリシナの救済の対象となるのは、彼を愛し、彼を信じる人々だけである。

最後に、山口論文はクリシナを「一切衆生を利益してやまない三界の導師」とみなしたが、このヴィシヌスの化身はアルジュナに対して彼の親族の殺害を命じ、戦争を正当化することを、いささかも意に介さない。しかるに『法華経』に描かれているブッダ(『世尊』)は、生きとし生けるものを例外なく救済する「三界の導師」である。ブッダはあらゆる存在を平等に慈しみ、彼らを差別しない。法華経のなかに描かれているブッダは最高に魅力的であり、彼の前ではクリシナは顔色を失う。神はすべての人に対して平等である。しかし、クリシナを献身的に崇拜する人々はクリシナのなかにあり、クリシナも彼らのなかにある。彼らは神の恩恵にあずかるはずである(Ⅻ・29参照)。

本書の第一篇、第三章において、塚本啓祥教授は「蓮華生・蓮華座の源流と展開」というテーマと取り組み、松長有慶教授は第四章において、「法華経院羅尼の特質」を扱っている。第五章において、北條賢三助教授は「法華経における言語的意識の背景」について書いている。塚本論文の趣旨は、塚本氏自身によって次のように要約されている——「……本章においては、『蓮華生』『蓮華座』の背景となる思想を中心として、『マハーバーラタ』と提婆品との関連を検討し、さらにその思想が、仏教の世界観、並びに仏像彫刻の発展に如何なる影響を及ぼしたかを論及しよう」(四三ページ)、と。塚本氏は「……十方の仏陀の国土に生をうけて、それぞれの生存において (garmani jannanti) この経典を聴聞し、天・人の世界に生まれて、すぐれた地位 (visistasthana) を獲得するであろう。また、どの仏国土に生をうけようとも、彼は如来の面前で、自然に生じた七宝づくりの蓮華のなかに生まれるであろう (aupapaduke sapta-ratra-naye padma upapatsyate)」という提婆品のなかの文句を彼の研究の対象として選び、この文句を徹底的に検討している。氏はマハーバーラタのなかの解脱法品第三三—三三七章を検討し、梵天 (Brahma) が蓮華生であることを文献的に実証した。さらに、氏は初期大乘経典に現われる蓮華生・蓮華座という語を、漢訳仏典について詳しく論じている。氏の論文のなかで特筆に値するのは、蓮華生・蓮華座に関連してマハーバーラタのテキストを検討し、あわせてそれを和訳したことであろう。

松長有慶教授の論文、「法華経院羅尼の特質」は、わたくしにとって極めて興味深いものである。宗教学においても、呪術と宗教の関係は大きな問題である。松長教授はまず真言、呪、および陀羅尼を厳密に区別し、次いで陀羅尼と呪文の結合を検討し、最後に法華経における除災の手段について詳論

している。

真言について、松長氏は次のように言っている——「真言、マントラは、すでに『ヴェーダ』聖典の中で、神がみに対する讃歌としてあらわれている。また『アタルヴァ・ヴェーダ』などでは、除災招福のための呪法のマントラも少なくない。これらがやがて大乘仏教の中に摂取され、密教教典の中では、真言と化して仏教による災害除去の呪文として再生する」(九〇ページ)、と。確かに、マントラは「呪術的な力を所有する語、および音声を含む祭詞」である。リグ・ヴェーダにおいては、まさに起ころうとする戦闘において勝利を確保するために、人々はマントラによって神々に祈念する(1・100)。また、かんばつを避ける場合にも同じである(V・68)。マントラによって、人々は人間に百歳の寿命を与えるように祈念する(1・89)。アタルヴァ・ヴェーダにおいても、マントラは熱およびその他の病気の悪霊を追い払うために役立つ(V・22。III・31)。

呪、すなわち、ヴィドヤーについて、松長氏は次のように述べている——「……それは現代のわれわれがいうところの科学と呪法との両方の意味を含んだものである」(九〇ページ)、と。ヴィドヤー (vidyā) は、ウパニシャッドにおいては、ただ一つであるもの、あるいはアートマンに関する認識ないし知識を意味するが、この認識は本質的に呪術的なものである。なぜなら、それは人間の願望を成就させる認識でもあるから。しかし、このような認識とは別に呪術的な熟練が存在する。松尾氏は、ヴィドヤーがこの二つを含むと理解していたのであろうか？陀羅尼 (dhāraṇī) について、松長氏は「それはヨーガ yoga の修法の一つである執持 dhāraṇā と関連し、本来は精神を統一し、心を一点に集中する意味をもつ」(九二ページ)と言っている。結局、「呪陀羅尼とは、三昧を自在になす力によって、災を除く、いわゆる呪文としての陀羅尼である」(九三ページ)。

さて、陀羅尼と呪文が如何にして結合したかについて、松長氏は次のよう

に説明する——「大乘仏教においては、陀羅尼を受持すること、明呪を誦すること、經典を誦誦し、受持し、書写することによって、さまざまな災害を免れうるものがしばしば強調される。陀羅尼、明呪、經典それぞれの誦誦が除災に結びつくのは、これらがいずれも仏の智慧、すなわち仏法を凝縮し、具体化したものであるからである。つきつめて考えれば、仏法そのものに除災の功德があるという信仰が、大乘仏教の流れの中で、根強くもたれていたところに原因がある」(九七ページ、と)。

さて、松長氏は『法華經』における除災信仰を次の三種類に分けて考察する。氏によれば、法華經における除災は、一 經典受持によるもの、二 称名によるもの、および三 陀羅尼呪によるものである。氏によれば、一の經典受持による除災は『法華經』のほとんど大部分の章(『品』)に見いだされる。氏自身は、これに関して次のように述べている——『妙法蓮華經』で言えば、古い成立といわれる囑累品までの前半二十二品にはもちろん、後半の藥王菩薩本事品第二十三、妙音菩薩品第二十四、妙莊嚴王本事第二十七の三品もまた、『法華經』の受持の功德による除災で一貫している。また觀世音菩薩普門品第二十五は、二の称名、陀羅尼品第二十六は三の陀羅尼呪、普賢菩薩勸発品第二十八は一の經典受持と、三の陀羅尼呪との混合とみなしうる」(二〇一—二〇二ページ)、と。

松長氏の挙げた除災の手段のなかで、特に注目し値するのは、二 称名によるものである。經典受持と陀羅尼呪が呪術的な性質のものであることは、明らかである。しかし、觀世音菩薩の名前を聞くこと、その名前を唱えることが呪術の領域に属するとは、わたくしにはどうしても考えられない。わたくし自身の考えによれば、生きとし生けるもの(『衆生・有情』)が觀世音菩薩の名前を聞く時に苦しみから解放されるとすれば、それは觀世音菩薩の大きな慈悲(『大悲』)ゆえである。生きとし生けるものが苦の大海から救われるのは、呪術という名の個人的な努力によってではない。それは觀世音菩薩が

衆生に働きかけるからである。また、生きとし生けるものが觀世音菩薩の名前を称えることも、決して衆生の自力によるものではない。概して菩薩は、もしも助けを求められれば、相手が誰であろうと拒絶しない。助けを求める人の願いを聞き入れない菩薩はもはや菩薩ではない。觀世音菩薩普門品第二十五によれば、生きとし生けるものは觀世音菩薩の名前を聞く時に、すべて苦聚から解放される。このような解脱・救済は呪術によってかち取られるのではなく、觀世音菩薩の恩恵によって力弱き衆生に与えられるのではなからうか? 普門品には、さらに次のように述べられている——「しかし、善男子よ! 河に流されている衆生が大菩薩である觀世音菩薩に対して助けを求めて号泣すれば、すべての河はそれらの衆生に浅瀬を与えるであろう」と。

衆生が助けを求めて觀世音菩薩の名前を唱えれば、この偉大な大菩薩は大悲によって彼らを救うのである。松長氏自身も、「この普門品が『法華經』とは別個に存在した独立經典であって、のちに『法華經』に付加されたといわれるのも、こういった普門品のみがもつ異質性にあるといえよう」(二〇二—二〇三ページ)と認めている。しかし、「……『法華經』の普門品に説かれている称名による除災は、『法華經』の受持、誦誦、聴聞による現世利益と同質であることがわかる」(二〇五ページ)という氏の見解を受け入れることに、わたしはやや抵抗を感じる。法華經には、確かに除災信仰は存在する。しかし、法華經を除災信仰だけで説明し尽くすことは果して可能であろうか?

## IV

本書の第二篇には第六章が収められている。第一章は平川彰教授の「開三顯一の背景とその形成」、第二章は中村瑞隆教授の「如来蔵と法華經の法身考」である。第三章は勝呂昌静教授の「唯識説と法華經の禪觀」である。第四章は、伊藤瑞毅助教授の「華嚴思想と法華思想」であり、第五章は三友健容助教授の「アビダルマ仏教における声聞成仏論と法華經」である。第六章は、

久留宮圓秀助教授の「ギルギット出土法華經写本拾遺」である。

平川論文のテーマは、法華經における一乘 (*Eka-yāna*) の思想である。法華經の中心思想が一乘であることは常識である。しかし、一乘思想について文献的な検討を加えることを、平川教授はこの論文において企てた。平川教授は天台大師智顛の「開三顯一」(『三乗を用いて一乗を顯わす』) という術語を手掛りとして、法華經における「一乘」の意味を明らかにしようとした。平川教授は最初に法華經における一乗とは何か、をみずからに問うている。そして、教授は法華經のなかで一乗を説明する上でもっとも重要なのは「方便品」であると信じ、この品(『章』)によって一乘思想の研究に着手した。そして、法華經の一乗を考察する前に、教授は天台の一乗の解釈をわれわれに示した。しかし、平川論文のテーマは法華經における一乘思想であるから、この問題に焦点を合わせて論評することが望ましい。「方便品」において説かれているのは、ブッダになるための教えであり、これが一乘であり、より厳密に言えば、「一仏乘」(*eka-buddha-yāna*) である。そして、ブッダになるための一乘は、すべての教えにおいて開かれている——これが平川論文のテーマである。

しかし、平川説は仏塔信仰との連関において比較的容易に理解されよう。平川説によれば、一乘思想の起源のなかに仏塔信仰の背景が認められるからである。「法華經」「方便品」、78—94の記述から、われわれは法華經のなかに仏舍利供養、仏塔建立などの思想を認めることが出来る。仏塔信仰を、人は「崇拜の道」と呼ぶ。これは大衆の信心深さに対する讓歩であり、極めて安易な解脱への道である。これに関して、ハンス・ヴォルフガング・シューマンは、『仏教 創始者、学派、および体系』(一九七六年。一七二ページ)のなかで、次のように述べている——「従って、崇拜の道においては精神的な態度は何の役割も果たさない。まったく『散乱した心でもって』実行されても、儀式は有効である。なるほど、この解釈は、正しい精神的な権えを強調す

る、他のすべての救いの道の確信と矛盾するけれども、しかし、まさにそのことによって弱い意思をもった人間に対しても、一つの解脱の希望を開くのである」と。平川論文においても、もちろん、このことは認められている(一五二ページ参照)。

結局、平川論文によれば、「……法華によって批判される三乗の内容は正確には分らない」(二七五ページ)のである。しかし、平川教授は、法華經における一乗はそれ以前の大乗の菩薩乘よりも優れていることを容認する。平川教授は法華經の一乘思想について、次のような結論を下した——「勿論、仏性の思想は法華經には明説されてはいないが、しかしそれに近い思想のあることは、すでに指摘した如くである。ともかくそのような立場で、部派仏教で説いていた仏菩提・仏乘の思想をも包摂し、その用語をも採り入れて、仏乘と、三乗を止揚した一乗とを一つにした広い立場を明らかにしたのが、法華經の一乘思想であると言ってよい」(二七五ページ)、と。

平川論文によって、われわれは法華經における一乘思想の重要性をあらためて再認識することが出来るよう。

「如来蔵と法華經の法身考」において中村瑞隆教授が問題にしているのは何であろうか？ 中村論文の目指すものは、如来蔵 (*tathagatagarha*、仏性の本質)、仏性の同義語である法身(法の身体)、および法華經の關係の解明にはかならない。「まえがき」のなかで、中村教授は論文執筆の動機について、次のように述べている——「……このように法華論の注釈は仏性・如来蔵という用語のない法華經の中にそれらを見出したように、法華經以後世親以前の成立と考えられる經典の中から仏性・如来蔵とかかわる語或いは文は何かを考え、それと法華經の關係を見たいと思うのである」(二八〇ページ)、と。

中村論文においては、三つの観点から仏性・如来蔵に関連していると思われる語がサンسكريット原典ならびに漢訳の両面から検討されている。教授

は、一 仏性・如来蔵の類語と法華経原典、二 漢訳法華経と法身、および三 法華経の所説と仏性義という三つのテーマの下に文献考証を試みている。中村教授の方法は厳密な原典研究である。教授は梵漢蔵の比較対照を試み、その学風は飽くまで実証的である。法華経に関しては、教授はギルギット、ペトロフスキー、ネバールの諸本を校合し、チベット語に関しては、北京版デルゲ版を使用している。一 仏性・如来蔵の類語と法華経原典においては、教授は法華経のなから (1) *tathāgata-jñāna-darśana*, (2) (*tathāgata-dhātu*, (3) *dharmakāya*, (4) *Buddhātva* あるいは *tathāgatatva*, (5) *dharmatā* という五つの主要な語を選択し、法華経のなかでそれらの諸語が何を意味するかを綿密に考証している。ただし、(1) *tathāgata-jñāna-darśana* の項目においてはサンسكريットの原典の文句は挙げられていない。ここでは世親の『法華論』の文句(漢訳)が引用されている。しかし、それ以外の四項目に関しては原典とそれに対する和訳が並置され、しかも必要に応じて漢訳の出典が明記されている。わたくし自身は、中村教授の原典研究によって啓発されるどころが少なくなかった。すでに触れられた五項目のなかの教授の説明は簡明であり、しかも必要なものは全部提供してくれる。教授の原典研究は、同時に法華経概論の一面も備えている、とわたくしは思う。

仏教学者、あるいは仏教に精通した人にとって、*buddha-dhātu* がある場合にブッダの遺骨(舍利)を意味するのは常識である。しかし宗教学者あるいは哲学者が *dhātu* の英訳として *relics* という語に出会えば、彼は *dhātu* を遺物、遺品、あるいは聖遺物と解釈するかもしれない。『漢訳対照梵和大辞典』の *dhātu* の項目には、漢訳を除けば、仏教的用法としては「界」という訳語が与えられているだけである。しかし、中村論文においては、ブッダの遺骨としての *dhātu* について原典に基づく明快な説明がなされている(二八二―二八三ページ)。法華経における法身についても、中村論文は出典を明記し、他の経典との比較において、あるいは漢訳を対照させ、法華経にお

ける法身の意味を解明している(二八四―二八六ページ)。他の項目についてもまったく同じである。二 漢訳法華経と法身についても、教授は同一の方法によって主要な語を説明している。しかも、必要に応じて漢訳には法華経のテキストが対照され、利用するのに極めて便利である。

中村教授は以上の二項目において法華経の原典と漢訳を通じて仏性・如来蔵と法身などが同義語であることを実証した。そして、教授は次のように述べている――「法華経に仏性・如来蔵の語がなくても、毎自悲願をもって一乗を説き、如我等無異、如我昔所願今者已満足の金口があるように、法華一経のどの一句を取っても成仏論の根拠とならないものはない」(二〇〇ページ)と。三 法華経の所説と仏性義に関して、教授は次のように述べている――「世親は法華論において、経に説く実相を如来蔵法身と解し、天台宗の諸師は経中の種々性相義・如是性・世間相常住などの文を法華仏性の文としたのであるが、今は語意の上から法華経の所説と仏性如来蔵と結びくと思われる(1) 仏知見、(2) 涅槃経に説く『法華の八千声門』(3) 原典に見られる『*prabhasvara*』(光浄)を介在させることによって妙法華の『知法常無性』、正法華の『諸法本浄』について一瞥しよう」(二〇〇ページ)と。

中村論文は綿密な文献操作をしているけれども、その底に流れているのは仏性に対する探究心、静かな情熱である。菩提は大乗仏教の最高目標である。生きとし生けるものが菩提を得るためには、彼らが仏性を内蔵していることが大前提である。法華経のなかに「仏性」(*buddha-dhātu*) という語が見いだされようと、あるいは見いだされまいと、仏性は法華経における論理的根拠ではなからうか?このような問題意識をもって中村論文は書かれたものであろう。教授にとっては、如来蔵も法身も「仏性」の同義語である。仏性は、一体、何処にあるのか?このように考えて、中村教授は法華経における如来蔵、および法身の観念の徹底的な検討を試みた。



「華嚴思想と法華思想」のテーマは、華嚴十地経との比較における法華経の「菩薩行」、ないし「菩薩道」である。伊藤氏にとっては、法華経は一乗の教えである。そして一乗は、仏乗 (Buddhāyāna) である。もちろん、仏乗は「仏になるための教」であるから、それは「実践道としては菩薩行 (bodhisattva-carya) あるいは菩薩道 (bodhisattva-mārga) に他ならない」(本書、二三九ページ) である。そして、同一性と相違という比較の方法を踏まえて、伊藤氏は次のように彼自身の研究の出発点を要約している——「要するに華嚴も法華も一乗という菩薩道を説示する点において共通であるが、菩薩道の具体的な体系においては相違があるということである」(二三九ページ)、と。伊藤論文の特徴の一つは、透徹した論理が見いだされることである。われわれは、氏の論証を通じて法華経の一乗が菩薩行にほかならないことを明瞭に見てとることが出来る。

さて、伊藤論文における一つのテーマは「経題に見る特質の異同」である。伊藤氏によれば、華嚴思想は思想的には華嚴の菩薩道であり、しかもそれが体系的に述べられているのは華嚴経のなかの「十地品」である。一方、法華経に関しては伊藤氏は久遠実成を顕示する如来寿命品を評価しながらも、平川教授の学説を受け入れて方便品を法華経の核心とみなすことに賛成し、「十地品」と「方便品」の経題の比較研究を本書において企てた。氏は菩薩行が華嚴と法華の中心思想であるという立場を堅持して、「菩薩道という観点より比較研究しなければならないであろう」(二四一ページ)と述べた後で、「なお華嚴大本中の普賢経典と法華の普賢菩薩勸発品との如きは、思想的には局部的なものであるからその対比は一往除外した方がよい」と言い、研究の対象を学問的に限定した。

伊藤氏は「経題に見る特質の異同について」というテーマを二重の観点か

ら考察し、最後に結論を下している。「十地経」(*Dśabhūmikāśūtra*) とこの経題から、伊藤氏は次のように論述した——「この経題から *daśabhūmi* (十地) と、この *bodhisattva-carya-praśāna* (菩薩行の体系) は *sarvajñā-jāna-guṇa-samcaya* (一切智者の智の功德の聚集) であり、したがって菩薩行は仏智の功德ある徳性であると知られる。また経の要旨は漸次に十地を成満して仏位 (*jñāta*) を成就するべきであるという点にある。したがって菩薩行を行することは仏智の功德を括性化することであり、仏陀を敵飾すること仏華嚴に他ならないであろう。……要するに経題より知られる経としての特徴は、一切智者の功德である菩薩地の法性 (*bodhisattva-bhūmi-dharmatā*) を略説する (*samāsa-nirdeśa*) という点にある」(二四五ページ) と。十地品の経題と比較して、法華経の経題の特質は何か？この問いに対して、伊藤論文は次のように答えている——「法華経は *maha-dharma* (= *saddharma*) たる *saṃdha-bhāsita* と *tathāgatāyus-pramāna* の真義を説示するものであるから *maha-nirdeśa* と称されたのであり、その真義に注目するならば無量義とシナ訳されうるのである。またかかる真義をもつ *saddharma* は *saddharma* 中の最勝なるもの *pūṇḍarīka* として *saddharma-pūṇḍarīka* とも称しうるのではないか。とまれ法華の *saddharma* は最勝法なのであり、それを説示するのが法華経である。提婆品に *Saddharma-pūṇḍarīka* が *īveśṭha-dharma-nirdeśaka* (最勝なる法を説示するもの) と換言されているのは、その意であろう」(二五二ページ)、と。「十地経」と「法華経」の特徴を、伊藤論文は次のように簡潔に要約している——「十地経は菩薩に対する菩薩行の *upadeśa* としての教授であるが、法華経は菩薩に対する *saddharma-nirdeśa* としての直接的な教授であると解せられる」(二五三ページ) と。十地経と法華経の題経について、結論において伊藤氏は三つの局面から要約して両者の特徴を明らかにした(二五四―二五五ページ)。ここで一言附加するとすれば、氏が法華経の *Saddharma-pūṇḍarīka* を、サツメルマ中の最勝

なるもの、ないしその実践的な実現と解釈していることである。十地経と法華経の間の同一性と相違は、当然、サツダルマという語をめぐって説明されねばならない。伊藤論文は、今や、サツダルマについて論究する。

伊藤論文は、まず最初に華嚴十地経における saddharma の語義として、

①如来の所説の法眼 (tathāgata-bhāṣita-dharma-netri) ②仏の菩提 (buddha-bodhi) ③正等覚者の教 (samyaksaṃbuddha-sāsana) を挙げている(二五九ページ)。伊藤論文は saddharma の三つの語義について次のように説明している——「この中、法眼 (dharma-netri) とは『法へと案内するもの』を原意とするから、シナ訳諸本に所『開演教、法目、経法、法輪と訳されている如く、『悟りの内容としての法へと導くための教えとしての経』を意味するといえよう。菩提 (bodhi) とは『悟り』を原意とするから、シナ訳のあるものには仏のそれとして阿耨多羅三藐三菩提と訳されている如く、また『漸』には仏・菩薩の悟りの作用の意味で諸仏諸菩薩業と訳されている如く、『悟りの内容としての法』を意味することは明白である。教 (śāsana) とは『いましめとして示すもの』を原意とするから、覚訓、法訓、所『教化』法、(正等覚) 教とシナ訳されている如く、『実践するべき教誡としての法』を意味すると言えよう」(二六〇ページ)と。

伊藤論文は、saddharma の三つの語義を確定してから、さらに十地経における正法 (saddharma) を、世親の『十地経論』の解釈を適用して理解している。世親の解釈によれば、saddharma の三つの語義は、①教法たる経、②証法たる三種の菩提、③修行法たる資糧である。そして、伊藤論文によれば、十地経の正法 (saddharma) は、教法、証法、および修行法を意味する。それゆえ、伊藤論文においては次のように述べられている——「すなわち仏の所証の法であり、如来の所説の法であり、正等覚者の修としての所教の法であるところに、法の法たる (sa) ことの所以があることになる」(二六一ページ)と。

伊藤論文は十地経における saddharma の三つの語義を文献学的に実証した後で、これらの語義が法華経においても一般的で、しかも基本的なものであることを示す実例を十例示した(二六五—二六九ページ)。そして、伊藤氏は、次のような結論に到達した——「以上、多数の諸例よりして『法華経』において、正法とは①(教法)であり②(証法)であり③(修行)であるところのもの、すなわち教法であると同時に証法であり、同時にまた修法であるようなもの、ないしは証法と修法とを撰持する、そういう教法を意味するものであり、教法・証法・修法を同時に所見として総持するところの仏の法を、価値評価的に総称したものであると見ることができよう」(二七〇—二七一ページ)と。

十地経と法華経における saddharma に関して、伊藤氏は次のように結論している——「saddharma は華嚴十地経においても法華経においても、①教法・②証法・③修法の三義を含意し基調として有する点では同一であるが、ニュアンスにおいて差異を見る」(二七三ページ)と。『法華経』の経題に関する限り、法華経は saddharma の nirvāṇa であるというのが伊藤論文の論理的帰結である。

さて、わたくしは伊藤論文の特徴を次のように要約したいと思う。伊藤論文は、大乘は実質的には菩薩乗であるという前提に立脚している。華嚴経も法華経も、実践道としては菩薩行を説いているというのが、この論文の基調である。法華経の中心思想である「一乗」は、結局、菩薩道を指すと考えていい。しかし、伊藤論文は十地経と法華経の同一性(＝菩薩行)と並んで相違の面も見逃さない。「十地経」が菩薩地の法性の略説であるのに対し、法華経は最勝法としての saddharma の説示である。しかし、それにもかかわらず、十地経における菩薩の十地に関して、伊藤氏は十地の最高位である第十地、すなわち、法雲の法を、「雲の如くに諸の他者に正法の雨を降らす」作用のあることから、正法 (saddharma) として理解している(「十地の名称」

『印度学仏教学研究』第二十三卷、第一号。

Saddharma の語義に関しては、山口教授がインド哲学との関連において興味深い記述を試みた(二九一三三ページ)が、伊藤論文は saddharma の語義に関して文献学的な立場から実質的な検討を加えて、それを確定した。特に、法華経における saddharma の三つの語義を、氏が法華経の原典に即して綿密に例証したことは、法華経研究に対する氏の一つの寄与である。われわれは伊藤氏のこの労作のお陰で、「正法」という経題が何を意味するかを正確に理解し得る立場に置かれたのである。

アビダルマ仏教の研究者として知られる三友健容氏は、本書において「アビダルマ仏教における声聞成仏論と法華経」というテーマで実証的に論述している。声聞 (śrāvaka) がブッダになれるかどうかは、大乘仏教における争点の一つである。三友氏によれば、単に法華経だけでなく大毘婆沙師においても声聞は成仏する望みがある。大乘仏教においては、生きとし生けるものの救済が約束されているのだから、声聞が成仏するのは当然のことと考えられる。三友氏はまず最初に声聞の定義をしてから、『法華経』における声聞成仏の論理的構造に言及する。そして、氏は「声聞が実は菩薩であり、菩薩が声聞(内秘菩薩行 外現是声聞)ということになり、声聞の形のまま、成仏するというように声聞成仏の論理が展開していくのである」(二九三ページ)と述べている。次いで、三友論文はアビダルマ論書における作仏論を、菩薩の成仏論、および声聞の成仏論の二面から詳論している。特に菩薩の成仏論はわたくしには興味深く思われる(二九四―三〇八ページ参照)。

アビダルマ仏教における声聞成仏論と法華経について、三友氏は次のような結論に達した——「……『法華経』における声聞成仏論では、①一仏乗の教えを聞いて信じ、②未曾有なることを得て、大歡喜を生じ、③疑網がなくなり、④実智に安住するという構造になっていて、『信』と『歡喜』が小乗から一仏乗への転機となっていることがわかるが、『大毘婆沙論』でも、頂

位は『信』と『歡喜』が重大な条件となっており、ここにおいて確立すれば、もはや悪趣に墮することのない忍位に到達できるし、また、この時点で菩提心を発せば、仏乗に入ることができる(三〇三―三〇四ページ)、と。そして、三友論文は最後に『法華経』の声聞成仏論と『大毘婆沙論』のそれを鋭く区別した。結局、三友氏によれば、これら二つの経典における声聞成仏論を区別するのは、「授記」である。『法華経』における声聞成仏論においては授記が基本であるのに、『大毘婆沙論』のそれにおいては授記は言及されていない——このように三友氏は言っている(三〇二―三〇三ページ参照)。

生駒幸運氏の英文要旨によれば、三友論文は次のように要約される——「このように前述の事柄が考察されれば、『法華経』も『大毘婆沙論』も、その共通の背景および共通の思想の基盤をもち、声聞はブッダになる(＝成仏すること)が出来るという理論を展開すると言われる」と。三友論文の趣旨は、たった今述べられたこの要約に尽きる。生駒氏の英文要旨は極めて簡明である。それはともかく、アビダルマの声聞成仏論と法華経のそれとの原典による比較研究は、正当に評価されねばならないであろう。

## VI

大乘仏教経典を代表するのは、言うまでもなく、『法華経』である。『法華経』の文体はかなり平易であり、文学的にも香り高い。『法華経』のなかには大乘仏教の主な教理が説かれ、しかもその上、多くの比喩と詩的例証も見いだされる。法華経の比喩については、本書のなかで丸山孝雄氏が「法華七喻解釈の展開」というテーマで詳論している(四三三―四六二ページ)。法華経の比喩の一つに「窮子譬喩」がある(丸山論文、四四六―四四八ページ)が、新約聖書にはこれと類似した放蕩息子のたとえが見出される(ルカによる福音書、15・11―32)。窮子譬喩と放蕩息子のたとえの比較研究は、宗教学の課題の一つであろう。松長論文、および伊藤論文においては、普門品が他の品と

性格を異にすることが指摘されたが、普門品の特異性を理解するためにも、野村耀昌教授の「敦煌変文に見る普門品の形態」（三三七―三八八ページ）は興味深い。なお、本書の第三篇「法華思想の展開には、野村論文、丸山論文のほかには河村孝照氏の「度量天地品・馬鳴菩薩品形成の背景」（三八九―四三三ページ）、および坂輪宣敬氏の「中国仏寺等における法華経変相」（四三六―四七〇ページ）が収められている。法華経の写本を扱ったものには、久留宮圓秀氏の「ギルギッド出土法華経写本拾遺」（三二二―三三四ページ）がある。

本書の第一篇、第五章の「法華経における言語論的意識の背景」（二〇七―二三〇ページ）は比較的長い論文である。しかし、そのなかで法華経とある程度関係のあるのは、三「法華経に於けることばの価値と意味」（一九一―二八ページ）という一項目だけである。結局、北條氏が言おうとしているのは、四「まとめ」の冒頭で述べられていることに尽きよう。そこで、氏は次のように言っている——『法華経』に於いて、経文を説誦あるいは筆写するといった作業によってさえ、そこに功德が生じるといふ因果関係を認める考えには、経典自体にすでに神秘的効力を内蔵しているからと見ているものであって、さらにそれは経典自体を構成する教説の価値を、教説の主意者たる仏陀にまで結びつけているからであろう。つまり、経典をすでに仏陀そのものと見ているからであって、そこには信仰といった基盤にたつて因果関係を結びつけているからである」（二九二―二九三ページ、と。第二篇、第三章の勝呂信静教授の論文「唯識説と法華経の禪定観」（二二一―二三八ページ）は、唯識説と法華経のかかわり合いに注目している。勝呂教授によれば、法華経と唯識説の間には直接の関係は見いだされない。教授は無量義処三昧に焦点を合わせ、唯識と法華経の関係を考察している。法華経自身の禪定に関しては、勝呂論文は詳しく論じている（二二二―二二三ページ）。そして、教授は法華経の禪定説の特徴について、分かりやすく説明している（二二三―二二五ページ）。

『法華経の思想と基盤』は、仏教研究者にとつただけでなく、広く仏教に関心を抱いている人々にとつても有益である。東アジア文化圏において、浄土系の信仰と並んで多くの人々の心の糧であり続ける法華経信仰は、われわれにとつて真剣に研究されねばならない課題である。アジアの心を知るためには、法華経の理解は不可欠である。西洋を知るためにはキリスト教、ユダヤ教、あるいはギリシア哲学の理解が必要のように、アジアを知るためには大乘仏教の理解は欠かすことが出来ない。そして、大乘仏教教典を代表するのが『法華経』である。このことについては、一点の疑い余地もない。『法華経』は決して一握りの専門家・学者のためのものではない。それは仏教に関心を抱くすべての人々の「共有財」でなければならぬ。シェクスピアなきイギリス、ゲーテなきドイツなど、われわれには想像することさえ出来ないではないか。それと同じように、法華経なき日本など、到底わたくしには考えられない。世界思想史においては、プラトン、ヘーゲル、あるいはニーチェなどのように抹消することの出来ない個性が存在する。宗教史においては、法華経は抹殺し得ない個性をもった偉大な書物である。

『法華経の思想と基盤』は既刊の七冊の論文集と同じく、法華経研究の基礎資料を提供する。もちろん、『法華経の思想と基盤』は、全体として理論的な考察にやや欠ける嫌いが無いわけではない。豊富な資料も、理論的な枠組みに組み込まれて初めて、生き生きとするのである。しかし、それにもかかわらず、本書は法華経について長年研鑽を積んで来た専門家の共同執筆になるものだけに、その所説には傾聴すべき点が少ない。今後、法華経を研究する人にとつて、本書は必読の文献の一つに数えられよう。

（京都 平楽寺書店、一九八〇年 四七七ページ、英文レジュメ、二五ページ、索引、一九ページ 定価、九五〇〇円）